

「2017 函館マラソン」開催状況

～ はじめに ～

函館マラソン事務局です。

2017年の函館マラソンは、この7月2日に無事開催することができました。

このたび8,130名のエントリーをいただいた函館マラソン、当日は6,963名もの方にご参加いただきました。寒さに震えた昨年とは打って変わっての高温多湿のもと、最後まで諦めず見事完走された皆様、本当におめでとうございます。

今大会は、完走率が約92%と昨年よりも2ポイント低くなりました。とりわけフルは7ポイントも減少し約84%。この数字は、皆様にとって今大会がいかに過酷であったかを端的に顕しております。

ですから此度は残念ながら完走に至らなかった皆様、ぜひとも「2018 函館マラソン」をリベンジの場として脳内中枢に強く印象付けていただき、さらにフィニッシャーズタオルを高らかに掲げて記念写真におさまるご自身の姿などもイメージされて、これからまたはじまる日常生活の一部として、厳しくも楽しい自己鍛錬をご継続いただければ幸いに存じます。

さて。

web上ではこのたびの「2017 函館マラソン」について、多くのお褒め言葉とともに、あわせてお叱りのお言葉も頂戴しております。相変わらずの至らぬ点、多々あったと思います。私自身、大会中の大事なところで数十分にわたる電話対応に追われ、その間、きめ細かい指示が出せなかったことが悔やまれますが、電話口から「責任者出せ！」と言われうろたえる若いスタッフに接近遭遇してしまえば、これはもう脊髄反射で電話に出てしまうのが管理職というものです。

交通規制に関し、憤懣やる方ない趣で電話をお寄せいただいたのは函館の市民。その後ろ側にはさらに多くの声なき市民が居るはずです。これはもう電話に出た以上は、その場で最善を尽くすしかありません。

あっ…気がいたらまた長々と書いている…ということで…みなさんいつものパターンですからおわかりですよ、それにわざとらしいし…ということで、さあ、恒例？の「函館マラソン開催状況」の2017版、スタートです。

～第1回 「飛行機が来ない！」～

2017大会開催前日の7月1日(土)の午前中のこと。この日の天候はうっすらと雲がかかってはいたものの気温は22℃程度、湿度もそんなになく過ごしやすい日でした。だからタイトルのおり誰かが廊下で「飛行機が来ない!」、「降りられないみたいだね」と話しているのを聞いて、「あれ、どこの空港でそんなことになっちゃってるの?函館はこんなに天気いいのに」と、全く意に介さず準備に勤しんでいたのですが…。

次の瞬間「金さんが来ない」と聞いて驚きました。それって函館空港のことだ。

9時10分着の航空便で函館入りする予定であった函館マラソングストランナーの金哲彦さんが定刻に到着できないの報に接し、確認のためあわてて各方面に電話すると、原因は「函館空港上空での濃霧発生」、その対応として「該当便は新千歳に向かった」、今後の状況は「濃霧は当分続く」、後続便も「出発地に戻るか新千歳に向かう」。

どうしてだ!去年天気が悪かったのも、ことし陸上競技場の上空がこんなに穏やかなのにヒコークが降りてこられないのも、全部オレに運がないからなのか?と心の中で嘆いたとき、また不思議な体験が。脳内にあのときのようなささやきが聞こえてきたのです。

「一番困ってるのは…お客様ですよ」

※不思議なささやき → <http://hakodate-marathon.jp/progress/> (第8回です)

「あ、そうだよこんな時こそ情報発信しないと…」

我に返って状況確認すると、ランニングクリニックは、主催者たる函館商工会議所青年部のスピーディーな判断により11時から部と14時半からの部が統合され、15時に一括催行されることとなりました。あとは新千歳に降り立った東京・名古屋・大阪からお越しの計4便・数百人に及ぶお客様に対し、webサイトの新着情報とフェイスブックで状況を報告し続けることができました。なお、各種の情報収集にあたっては、状況が逼迫する中、多くの企業・団体からご協力をいただきました。この場で御礼申し上げます。やはり持つべきものはいざという時、頼りになる「関係者」ですね。

新千歳着となってしまったお客様におかれましては、その後の移動などで大変な思いをされたことと存じます。あらためて…本当にお疲れさまでした。その後、函館空港の直上を取り巻いていた黒灰色の濃霧は午後2時頃から徐々に薄らいでゆき、やがて競技場の上空をかすめるいつものルートで大きな翼が続々と舞い降りだしたのであります。



金哲彦ランニングクリニック開催状況
7/1(土)15:20撮影 ※青空が見えますね

～第2回 荷物預かりについて～

「はじめに」のところで触れた交通規制に関する電話対応。それを終えると「ゴール後の荷物引き取りにランナーの長蛇の列」の一報が…現場を確認すると報告どおり陸上競技場までお客様の列が出来ておりました。原因は、荷物預かりに関し、昨年大会の開催を通じて寄せられた「セキュリティを上げて」というご指摘に確実に応えるため、荷物の引取りの際に「対面受け渡し方式」を導入したこと、それに尽きます。

バックヤードを覗くと十数名のスタッフが、文字通り「走り回り」ながら作業を進めておりましたが、

- ①受付でお客様のゼッケンを確認する
- ②スタッフが該当ナンバーの荷物を素早く取りに行く
- ③受付で、ゼッケンと荷物を照合し、お渡しする

という一連のサイクルのうち、ハーフ終了後におけるランナーに対し②の部分が徐々に対応できなくなり、結果、列の延長が増大していったとのことでありました。

状況改善のため途中で大量のボランティアスタッフを投入しましたが、改善の道筋が見えなかったことから、急遽、現場でのご判断をいただき、昨年スタイルの「出口確認方式」に変更、まもなく行列は解消されたのでありました。

お客様に約束した対面での受け渡しを変更するのは、トラブル発生時には抗弁できない重篤なリスクを抱えることとなります。それでも会場全体の運営を踏まえ決断していただいたヤマト運輸さん、ありがとうございました。

荷物引き取りで長時間並ばれたお客様には炎天下で不快な思いをさせてしまい本当に申し訳ありませんでした。今回はこのような事態は「発生しない」ということを、来る2018大会の開催まであと1年弱に迫った今の段階から確実にお約束いたします。

対策の方向性としては、セキュリティと回転数の両立、即ち、荷物の引取り時における「出口確認方式」をチューニング（荷物かごから各自がピックアップする際の係員の立ち会い+出口を狭小化しゼッケンを複数回照合+防犯カメラの導入…など）します。なお、これら対策の導入が参加費アップに繋がらないよう、もちろん調整します（あ、「2018大会準備状況」の内容に踏み込んでしまった…）。



荷物引き取り時に発生した長い行列
(炎天下に…申し訳ありませんでした)

～第3回 高温多湿（その1）～

夏のマラソンになりましたね。

炎天下での大会催行にも対応できる、いや対応するんだ！という強い意志をもって、我々、このことを「フル化」の準備段階から重要課題として設定し、これまで体制構築に努めてきたのであります。マラソンは、時にヒトの生命をも左右する危険な競技だからです。

そのような考えで、函館市医師会の全面的なご支援のもと大規模な医療チームが編成され、大会催行に備えていたのでありますが、昨年の大会は、設定とは真逆の現象が起き、みなさんの健脚を誇るべきフィールドは、低体温症の方が出てしまうような寒くて辛い大会となりました。

それが今年は一転し、当初設定通りの暑い大会となりました。スタート後、刻々と時間が経過していく中で熱中症の方が頻出いたしました。これを数値で見ると、これまで救急搬送（救急車の出動）件数が一番多かったのは、9月末開催時代である2013年大会（3千6百名参加・ハーフマラソン）の際の9件でした。一方、参加者数がほぼ倍、走る距離も倍となった今大会の救急搬送数は14件（去年は4件でした）。

この多寡を軽々に申し上げるのは差し控えますが、強風で医療テントの設営すら危ぶまれた昨年大会の経験を踏まえ、コース上の7箇所に、バスを活用した救護所を設営いたしましたので、医師および医療スタッフの確実な対応に加え、バスならではのエアコンの効いた空間で回復された方も多かったと伺っております。

何れにいたしましても、今回、350名にもおよぶ医療スタッフを編成していただいた函館市医師会のご尽力に感謝を申し上げますとともに、北海道看護協会道南 南支部、北海道理学療法士会 道南支部、北海道柔道整復師会函館ブロック、函館厚生院看護専門学校、市立函館病院 高等看護学院、函館市医師会看護専門学校、函館市消防本部、南渡島消防事務組合、函館サイクリング協会、北海道救急医学会、北海道ハイテクノロジー専門学校、そして全国各地からお越しいただいた日本医師ジョギーズ連盟の皆様には心よりの御礼を申し上げます。

今後は運営委員会 医療・救護部会の開催を通じ、今大会における医療面での問題点の掘り起こしと課題の整理、そしてそれらへの確実な対応を図り、より一層の安全性向上策を追求してまいります。



舞台裏の状況（医療・救護本部）
※奥側が大会本部です

～第4回 高温多湿（その2）～

私事で恐縮ですが、2017大会を終えた翌週の7月9日の日曜日、ほぼ1か月ぶりにロードバイクでロングライドに出かけました。コースは道南の活火山「恵山」巡り。

練習不足かつ前日の深酒&睡眠不足で臨んだ往復100キロの行程でしたが、炎天下とはいえ水分補給さえきちんとしていればなんとかならうて…といった軽い考えです。すいすい走破していた後半80キロ地点で、突然の悲劇が舞い降りてまいりました。

なんと、いつもは軽々と登れる100m程度の坂の途中で、

- ・まずは左大腿部に僅かな痙攣を感じる
- ・それをかばうようにペダルを漕いでいると、今度は右大腿部に大きな痙攣を感じる
- ・このままでは転ぶ！という焦りから本能的に自転車を飛び降りる
- ・自転車を何とか支え、上半身を伸ばすと臀部から両ふくらはぎに至るすべてが痙攣
- ・1ミリも動けない状況が5分程度続く（この間、ぴっちりとした自転車用ジャージを着用した中年男が道路の真ん中で悶絶している…という何とも奇妙な図が展開）

皆さんが挑まれた「2017函館マラソン」でも、同様の光景が数多く展開されていたと伺っております。これぞ「走らない」のにフルマラソン課長である私と、「走る」ランナー皆様との邂逅の瞬間。この実体験を通じ、あらためて補給の大切さを感じた次第。

今大会では昨年大会の経験を踏まえ、給水関係では水切れだけは起こさぬようにと全エイドステーションで複数の給水ラインを確保したほか、全エイドでアクエリアスを供給するとともに、車両6台編成によるアクエリアス補給の遊撃隊を組織、アクエリアス切れも防止いたしました。また、フード提供エイド（5箇所）には塩も配備いたしました。この結果、あのような高温多湿の環境下においても、給水については万全の体制で臨むことができたものと考えております。これで次のステップ（給水所の増設）に進めます！

一方において課題も明らかになりました。web上での皆さんからのコメントをみると、水やアクエリアスが「ぬるかった」。そしてフル・ハーフ供用区間に存するエイドステーションのうち、完全分離した第1、第4エイドでは、従事団体から「交錯はほとんどみられなかった」との報告を受けている一方で、第5から第7、とりわけコース幅が狭い第7エイドではフルのランナーから「給水できなかった」という声も届いております。

これらを含め実施状況を確実に把握し、さらなる進歩に向け取り組んでまいります（詳しくは、後にアップする？「2018函館マラソン準備状況」をお待ちください）。



フル・とハーフが「交錯」した
第7エイドステーション

～第5回 いよいよ号砲～

昨年大会では、「この日のために、この号砲を聞くために取り組んできたんだよなうんうん…」などと妙に感慨深い趣でスタートの瞬間を待ち望んでいたのですが、諸々のドタバタなどへの対応もあって結局は記念すべきスタートの瞬間をするりと見逃してしまった私なのであります。

だからこそ今回は確実に！という強い思いで、轟音を聞き逃すべくもない確実な場所、即ちスターターたる市長を含むスタート台登壇各氏のエスコート役を買ってでたのであります。それに今回、号砲は2回鳴ります。余程のことがない限り聞けるでしょう。

そして、その時はあっけなくやってきました。

号砲は、思っていたよりもか弱い音色でした。ただし、それを合図として一斉にスタートして行くハーフマラソン集団の地鳴りを特等席から格別の思いで体感することができたのであります。マラソンっていいもんだ。

5分12秒で全員がスタートしたハーフ集団の後を追う形で、9時10分にスタートするフルマラソンの隊列も同時並行でどんどん形成されて行きました。

フルの集団は、大きな河の流れのようにスムーズに、かつ確実にスタート地点へと向かい、やがてフルマラソンのスタート態勢が整ってまいりました。誰一人割り込みをすることも無い穏やかで心地のよい空間をランナーの皆さんと共有していると、後方から何やら聞き覚えのある「オトン！」のかけ声が。息子でした。

「さっきからずっと見てたんだわ」、「随分とマジメに仕事してるな」などと冷やかされてから程なくして、彼も号砲とともにすいすいとスタートを通過して行きました。フルマラソンは3分35秒と、驚くほどの速さで全員がスタートしていったのであります。

それは、昨年大会の開催を通じて大きな課題となった選手集合とスタート時の混乱が解消された瞬間でした。問題点を共有し、議論を尽くし対策を練られた道南陸上競技協会の皆様、本当にありがとうございました。今回の方式であれば、今後、いろいろなことが計画できますね。



号砲とともにまずはハーフがスタート！

～第6回 10分間時差式スタートについて～

時差式スタートの導入にあたっては、「2017函館マラソン準備状況（※パート1）」において、その導入によるプラスとマイナスの効果などを考察していたところです。

<http://hakodate-marathon.jp/history2017/>（※この第5回から第7回をご一読願います）

かいつまんで申し上げますと、時差式スタートを導入すれば、

- ・スタート時の混乱については解消できる
- ・一方、先発種目の遅いランナーと後発種目のトップとの間で「追い越し」が発生する
- ・「追い越し」は10分間時差で2キロ地点、20分間時差でも4キロ地点で発生する
- ・現状、20分間の時差を設定できる環境にはない というものです。

その後、関係機関との協議を経て、2017大会では「ひとまず」10分間時差式スタートの実現が叶いました。そして上記考察のとおり「追い越し」も発生しました。

「追い越し」、「追い越される」両者の関係は、互いに「邪魔」な存在として認識されてしまいがちです。このため極力ストレスが発生しないよう、競技面を担当する道南陸上競技協会において多くのスタッフがコース上に投入され、互いの分離を促す手持ち看板や個別の注意喚起など、各種の対策が展開されたのであります。ただし、結果として、それでも多くの方から「不十分」とのご指摘を受けたのは事実です。

この件、現状では解決に向けた道程は遠く、厳しいものがありますが、次回大会の開催要項を公表する来年1月中旬までの間に、関係機関・団体との協議を深め、一歩前進の改善策を展開できれば…と考えております。

「ハーフを8時スタート、フルを9時スタートとすべきだ」、あるいは「フルとハーフを別々に開催すべきだ」等のご意見があることは承知しております。そうしたご意見は函館マラソンの「理想型」を希求していくうえでは有益であり、今後、聖域を設けずに議論をしてまいります。一方においてこの散文の全シリーズを通じてこれまで書き続けてきたことは、市民生活とマラソンという大規模イベントとの調和。

調和なきものは淘汰され、最終的に形は残らないのかなと考えております。だからこそ今日、多くの大規模マラソンが辿ってきた成長の過程などを参考としながら、少しでも理想型に近付いていけるよう、「一歩」を大切にしながら前進してまいります。

この辺のイメージは、成功体験を基として緩やかな合意を積み重ねていくことで毎回「あと10分」を希求していく…といった感じでしょうか。この場で何度か触れてまいりました「6時間マラソン化」は、そうして歩んだ道の先に必ずあると信じています。

～第7回 ボランティア協力会の立ち上げ～

17大会のスタッフ数は総勢2千9百名となりました。昨年よりも約4百名の増です。凄いことです。本当にありがとうございました。

この3千人近くの「一人一人」に対し、自らのミッションをご理解いただき、現場では完璧な対応をしていただき、最終的にはご本人が満足されて「来年も手伝うから！」と仰っていただけるか否かが、今後の大会運営のために重要なポイントとなります。しかし、函館マラソン大会実行委員会事務局は都市型マラソンの中で「日本一小さい事務局」を標榜しております。我々が、ボランティアスタッフ一人一人をきめ細かくマネジメントできるか？…これって実はかなり難しいことなのであります。

そこで考えたのが「函館マラソンボランティア協力会」という組織の実験的な新設です。具体的には、ボランティアスタッフが所属する企業や団体、町会など何十もの組織に対する事前説明会の開催、当日の現場運営、事後の挨拶まわりなどを担っていただき、エイドステーションの円滑な運営を目指します。

この初めての取り組みにあたり、最も重要なのはパートナー探し。「この団体ならば…」と当方から3つの団体にお声がけをさせていただきました。フル化の推進メンバーである「函館商工会議所青年部」からは即決で「やります」、函館駅前の緑化を担い函館新道の花壇づくりでは千人近くのボランティアさんの参画を得ている超実力派のNPO「スプリングボードユニティ21」さんからも「マチのためならやるわよ！」と。

また、協力会の事務局機能を担う基幹団体については実行委の一員でもある「函館市文化・スポーツ振興財団」にご参画いただきました。同財団は、これはもう大きな組織ですから年度の途中でこの種のことを依頼されるのはイレギュラーであり苦心されたと思います。熟慮のうえ出された結論は「やってみたい」。本当に…感謝しております。

今回、11箇所あったエイドステーションの運営は、上記3団体から各エイドに派遣された2～3名のスタッフが率い、トラブルにもその都度、臨機応変にご対応いただき、あのような高温多湿のなか、水切れ等も発生せず無事終えることができました。

現場はさぞかし大変だったでしょう。3団体からは「今回の経験、大きかったわ」、「最初は自信なかったけどもう大丈夫」、「来年は安心して任せて」…と仰っていただきましたが、その前向きな姿勢には感動を覚えたのであります。函館いいね！



今年も約百名体制でランナーをお迎え
第5「テオー小笠原」エイドステーション